佐土原キリスト教会･2021 年 9 月 12 日･礼拝説教
聖書箇所：マルコ福音書 1 章 12～13 節
説教題：試練があっても

インターネットに色々な動画があります。先日、こんな動画を見ました。アフリカの自然公園の中で、1 匹のライオンの赤ちゃんが置き去りにされていました。ケガか何かで、親ライオンが「育てられない」と判断して、置き去りにしたのだろう、ということでした。その赤ちゃんライオンを見つけた 2 人の人が―(動物学者だったと思いますが)―その赤ちゃんライオンを一生懸命介抱して、成長するまで育てたのです。ゴールは「自然に帰すこと」でしたから、自然の中で生きて行けるように、狩り等も教えながら育てました。やがて成長した時、2 人はそのライオンを自然に帰しました。それから 1 年後です。2 人は、自分たちの育てたライオンがちゃんと生きて行っているか、それを見るために、自然公園にやって来ました。そこで、自分たちの育てたライオンの姿を見ることが出来ました。立派に生きていました。ところが、ライオンの方は、2 人を見つけると、2 人の方にやって来て、そして大きな体で 2 人に抱き着いたのです。自分を育ててくれた 2 人のことを覚えていたのです。ライオンが人間に抱き着いて愛情を示している動画は初めて見ましたので、非常に印象的でした。ライオンというと、恐ろしい感じですが、しかしライオンも神の被造物です。ライオンと人間がじゃれ合うような世界は素晴らしいと思います。今日の聖書箇所を読んで、その動画を思い出したことでした。今日の聖書箇所とライオンがどう繋がるのか、後ほど触れます。

イエス様は、およそ 30 歳になられた時に「神を宣べ伝える生涯」に入られました。まず為さったことは、バプテスマのヨハネから洗礼を受けることでした―(1 章 9～11 節)。ところが、その喜びの洗礼の後、荒野でサタン(悪魔)の誘惑を受けられます。イエスが誘惑を受けられた記事は、何を語るのでしょうか。今朝は「神の摂理の御手を信じる」というテーマで学びます。

テーマ：神の摂理の御手を信じる

13 節に「イエスは四十日間荒野にいて、サタンの誘惑を受けられた」(13)とあります。イエス様は荒野でサタン(悪魔)の誘惑を受けられたのですが、「40」という数字は、「旧約」における様々な苦難、試練の時を連想させます。「出エジプト」の荒野の旅は、40 年続きました。エリヤは、40 日 40 夜、荒野を歩き続けてホレブの山に着きました。そのように、「40 日間」という言葉は、それが大変厳しい試練の時であったことを表現します。「マルコ福音書」にはありませんが、「マタイ福音書」と「ルカ福音書」には、サタンがイエス様をどのように誘惑したかが書いてあります。サタンは、断食の後で空腹でたまらないイエス様に向かって「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい」(マタイ 4:3)と言いました。それをイエス様が御言葉で退けられると、さらに 2 つの誘惑を仕掛けて来ますが、いずれも「神から与えられた力(賜物)を自分のために―(自分を満足させるために)―使いなさい」と誘惑して来たのです。それはつまり、イエス様を、「神の願われる生涯を生きる」という救い主としての道から逸らせようとした、ということです。イエス様は、それを全て「聖書の言葉」を用いて撃退されます。

しかし、なぜか「マルコ福音書」は、その有名な「イエスとサタンとのやり取り」を書きません。イエス様の公生涯における大きな出来事です。なぜマルコは、それを詳しく書かなかったのでしょうか。実はマルコは、詳しく書かなかったのではなくて、どうしても書かなければならないこの出来事のポイントだけを書いたのです。そのポイントとは、「野の獣とともにおられたが、御使いたちがイエスに仕えていた」(13)ということです。「イエス様は、荒野にあってサタンの誘惑を受けられ、しかも野獣―(人に害を加えるもの)―に囲まれて過ごされた。しかしその中で

天使達によって守られた」という事実です。もちろん天使達は、神の命令によってイエス様を守っていたのです。「サタンの誘惑も激しかった、イエス様の置かれた状況も厳しかった、しかし神はイエス様を守り抜かれた」。マルコが言いたいのは、そのことなのです。実際この個所を読むと、サタンが登場する前に「御霊はイエスを荒野に追いやられた―(神の霊がイエス様を荒野に追いやった)」(12)と書いてあります。「神様がイエス様を荒野に行かせた」と言うのです。つまり、この出来事の全体を後ろから支配しておられたのは、神様だったのです。だからこそ神様は、天使を送ってイエス様を守ることが出来たのです。

しかし、そうすると疑問が湧きます。「なぜ神様はイエス様を荒野に連れ出されたのか」という疑問です。その機会に乗じて、サタンはイエス様を誘惑して来たのです。神様がイエス様を「誘惑され易い」危険な状況に置かなければ、サタンも誘惑出来なかったかも知れません。そんなことも思います。なぜなのでしょうか。

「山崎パン」という会社があります。創業者は飯島藤十郎という方ですが、創業期を乗り越えた頃、あることで家族3人が対立して収拾がつかなくなったのです。飯島さんは、洗礼は受けておられませんでしたが、信仰は持っておられました。対立を何とかしようと3人で話し合って、3人揃って洗礼を受けることにされたそうです。それも不思議な導きですが、そうやって飯島さんはクリスチャンになりました。そして3人の関係が回復して、会社が上手く行くようになったのです。しかし、飯島さんが次のような証しをしておられます。「私は、事業が非常に困難な時に、多額の投資をして、新しい工場を建てました。『これで上手く行くだろう』と思ったのです。しかし、その工場は火事で全焼してしまい、本当に辛い思いをしました。私はそれを機会に色々なことを考えさせられました。家族はバラバラで心を合わせるということもなかった。また自分の信仰はいい加減で、きちんと教会生活も守っていなかった。名ばかりのクリスチャンだった。そういうことが示され、『よし、あたらしい工場ではなくて、自分の信仰生活を建て直そう』と思いました。信仰を大切にして行く決心をし、教会生活を守ることにしたのです。すると家族が共に祈る、そういう姿になって来ました。そして事業も少しずつ回復したのです。あの火事は、お先真っ暗になるような出来事だったけど、神はそれさえも用いて、私に沢山のことを教えて下さり、事業だけでなく。私を建て直して下さったのです」(飯島藤十郎)。決して、神様が火事を起こした、ということではありません。神はそんなことはされません。火事は何らかの原因で起こったのでしょう。しかし神様は、先の祝福を見越して、その出来事を用いられることがある、ということを申し上げたいのです。確かに大変な苦労であられたことでしょう。しかし飯島さんは、永遠の観点から「自分の立て直し」をしてもらったことを喜んでおられるのです。そして現在、山崎製パンは、日本の輸入小麦の10%を使うと言われ、年商9000億円以上の会社になっているのです。神様が痛みを用いられるなら、そこには、神様の深いお考えがあるに違いありません。神様は、必ず色々な形で試練を祝福に変えて下さるのです。もし、何もかも上手く行って、しかし肝心の「自分の建て直し」がなされなければ、それは、地においても、天においても、取り返しのつかないことだったのではないでしょうか。何より多くの信仰者が「人は試練を通してのみ、神の御心に適うような者に磨かれる」と言うのです。

アメリカで3000万部も売れた「人生を導く5つの目的」という本があります。著者のリック・ウォレン牧師が次のように教えています。「人格というものは、試されることによって成長する。神は、日々、あなたに相応しいテストを用意されるのです…(そして)…神はあなたが人生のテストに合格することを願って…直面する問題が手に負えなくなるほど大きくなり過ぎないように配慮して下さるのです。神は…その問題と取り組むための力を備えて下さるのです」。

「イエス様が荒野で誘惑を受けた」、この記事は、私達に何を語るのか。イエス様は「あなたは

わたしの愛する子、わたしの心に適う者」{マルコ 1:11(新共同訳)}という神様の言葉を聞いて、神様の御心に適う救い主としての道を歩み出されたのです。それは、最後の最後まで、十字架に至るまで、愛と赦しによって、罪人を神の許に回復するという救い主の歩みでした。その歩みをサタンは、誤らせようとしたのです。しかしイエス様は、神様の助けによって、その誘惑(試練)を乗り越え、ここにおいて「神の御心に適う救いを成し遂げる救い主」としての歩みを確かにされたのです。

私達も、クリスチャンになっても様々な問題は起こります。辛いこと、苦しいこと、落ち込むこと、悩むこと…色々なことが起こります。サタンは、私達に神様を信じさせなくすること、私達を神様から引き離すこと、それに最大の喜びを感じる存在です。だから、その問題の中で私達の心に囁くのです。「お前が困っているのに、苦しんでいるのに、神は何もしてくれないじゃないか。いくら祈ったって何も変わらないじゃないか。神なんか信じてもダメなんだよ」。あるいはもっと巧妙に、私達の心に「神を疑う思い」を起こさせるのです。「神は私には不当に厳しいじゃないか。いや、神なんか本当はいないんじゃなか」、そう思わせるのです。しかし「神なんかいないんじゃないか」と思い始めるところで、私達の心の中に「荒野」が生まれるのです。だから大切なのは、「いや、神様を信じよう」と選び取ることです。それが、イエス様が為さったことだし、飯島藤十郎さんが為さったことなのです。聖書は言います。「もし私達が…同じ気持ちで、神様に信頼し、最後まで忠実であれば、キリスト様にあるいっさいの祝福を、受けることが出来るのです」(ヘブル 3:14 リビング・バイブル)。今は見えない。しかし神様は、永遠の観点から「そこを通った方が通らないよりも良くなる」と思われた時、先に祝福を見ておられる時、試練を許されることもあると信じます。だから「今は分からないけど、神様はきっと大きな計画を持っておられて、この嬉しくないことも、その御手の中で支配しておられるに違いない。私は神様を信じよう、私は神様に信頼しよう」、そうやって神様に信頼することを選び取ることが大切なのです。

その時、信仰の目が開かれ、私達が問題の中で問題に潰されてしまわないように、サタンの誘惑(悪の力)によって潰れてしまわないように、神が―(御使いを送って)―私を支えておられる―(守っておられる)―ということ、「まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる」(詩篇 91:11)、このみ言葉の真実を、経験するのではないでしょうか。そして「荒野は―(試練は、問題は)―神のおられない世界ではない。それどころか、神の支え、神の守りを経験するところだった」ということが分かって来るのではないでしょうか。

しかし、この個所が教えることは、それだけではありません。13 節の「イエスは…野の獣とともにおられたが、御使いたちがイエスに仕えていた」(13)という言葉を、新しい「新改訳 2017 年版」は「イエスは野の獣とともにおられ、御使いたちが仕えていた」(13)と訳しています。「が」がないのです。「が」がないとどうなるかというと、「野の獣とともにおられた」ということが悪いことだったのではない、というニュアンスになるのです。どういうことかと言いますと、「旧約」の「イザヤ書」に、やがて救い主が支配する世界について、このような描写があります。「狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。雌牛と熊とは共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛のようにわらを食う。乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子はまむしの子に手を伸べる。わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわない。主を知ることが、海をおおう水のように、地を満たすからである」(イザヤ 11:6～9)。弱肉強食の世界は消え、獣と獣、人間と獣が、和合して暮らしている様子が描かれているのです。最初に申し上げたライオンと人間が抱き合う世界が実現しているのです。そのように訳すと、イエス様は、荒野で神様の祝

福の世界を既に経験しておられる、ということが言えるのです。それを私達も経験するということです。この話も何度もしますが、ある方は、職場の人間関係で随分と悩まれたのです。「神様、なぜこんな人を私の近くに置かれたのですか。この人事が為された時には、神様は寝ておられたのですか」、そう呟いておられたのです。しかしある日、御言葉が響いて来たそうです。「自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたがたにどんな報いがあろうか」(マタイ 5:46)。それから「敵を愛する」という十字架を背負って歩き始められたのです。その中でその方は、神様を近く、近くに感じるようになって行かれたのです。やがて「あぁ、この人は私を神に近づけてくれる人だったのだ」と思えるようになられたそうです。試練の只中で神の祝福を経験されたのです。そういうことが起こるのです。

いずれにしても、聖書は言います。「主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるから…あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は…わたしたちの益となるように…わたしたちを鍛えられるのです。およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。だから、萎えた手と弱くなったひざをまっすぐにしなさい」(ヘブル 12:6～12 新共同訳)。試練は、時に私達を打ちのめします。しかし私達は、神様の御手の外にいるのでない。神様は全てを知っておられ、その支配の御手の中で、本気になって私達を育てようとしておられるのです。「平和な義の実を結べるような者、本当に信仰の喜びを味わえるような者」にしようとしておられるのです。だから必要な、相応しいテストをあえて許されるのです。その中で、神は私達を祝福に向かって造り替えようとしておられるのです。あるキリスト者が言いました。「私は嵐を恐れない。その中で、船の操縦の仕方を学んでいるのだから」。心に「荒野」が生まれそうな時、でも私達は、そこにも神様の摂理の御手があることを信じて、やがて試練が祝福に変えられることを信じて、そこで神様に信頼することを選び取って行きたいと願うのです。